

ヤスパースにおける精神病理学と哲学

新井 恵雄

ヤスパースが哲学者としての道を歩み始める以前に、精神病理学者として優れた業績をあげ、現象学派と呼ばれる一派を創始したことはよく知られている。一九一三年の『精神病理学総論』は「一挙に科学史の中に不朽の場所を獲得した」画期的な著作であったと云う(1)。

そのようなヤスパースが、何故精神病理学を去って哲学に移ったのか。彼の精神病理学と哲学とはいかなる関係にあるのか。この関係はいかなる影響を彼の哲学にもたらしたか。これらの方を解きほぐすことに、精神病理学をあれ、哲学をあれ、ヤスパースを研究する者にとって興味ある課題であろう。この論文はその課題のための一つの試みである。ただし、私の関心は哲学にあり、これらの問題を、哲学の視点から考察することが私の目標となる。

この論文では、しかし、考察の対象を了解心理学と実存照明の関わりに限定する。精神病理学と哲学のつながりは、ヤスパース自身によつて、何よりも了解心理学と実存照明の関係という形で語られているからである。彼によれば、了解心

理学は最後に二つの了解不能なものに突きあたる。一つは意識外の機構としての肉体的なものであり、その解説は因果連関の把握による説明として果される。即ち説明心理学の果すべき仕事である。他の一つは「不解可能なものの根源として了解可能以上のもので」ある実存であり、これを課題とするのが実存照明である。従つて、経験的心理学としての了解心理学と実存照明とは根本的に異つたものであるが、実存が了解可能なものの限界に立つ限り、実存照明は了解可能性の領域に踏みこまねばならない。実存照明は了解心理学を通じ、その助けによつてこの了解可能以上のものに触れるのだ、とされている(2)。

ここでは、ヤスパースの精神病理学と哲学との関係は二重の側面を持つてゐる。――

一つは両者の間に横たわるはつきりした断絶であり、経験科学としての了解心理学から哲学へは飛躍によつてしか達せられないことである。

二つには、それにもかかわらず、実存照明がいわば了解心

理学を方法として成立してゐるに違ひある。この点からすれば、了解心理学は経験的心理学と哲学との媒介的中間者である。ある箇所ではヤスペースははつきりとそのように語つてゐる(2)。

それ故この論文では私達は了解心理学に着目し、この二重の側面がヤスペースの哲学にとってどのような意味を持ち、それにどのような性格を与えたか、またそのことを哲学的にいかに評価すべきか、を考察するにしたまう。

まず、私達はヤスペースの精神病理学、特に了解心理学の特徴と、それがどのような問題点を持つか考察してみよう。

(1)

次に、了解心理学との関係において、実存照明がどのよくな性格と問題点を持つようになつたか、考察することにする。(1)

最後に結論として、以上の成績をもとに、ヤスペースの哲学を批判的に考察し、私達に残された哲学的課題を把握したく思つ。(11)

(2) 題名の下の括弧の中の符号はその本の略号を示し、今後その本を引用する際に使用する。

ヤスペースは精神病理学の対象について次のよう規定している。

「我々のテーマは、心を病んでゐる、あるいは心的条件

で病んでいる人間全体 der ganze Mensch である。」(1)

この言葉は既に多くのことを語つてゐると思われる。

先づ、この言葉は、グリーゼンガー以来、精神病理学の基礎となつた、「精神病は脳病である」という規定にヤスペースがくみしないことを示していよう(2)。彼によれば、精神病理学の対象は心であり、心とは意識である(3)。それ故、精神病理学はいわば心理学となる(4)。

しかし更に、精神病理学のテーマが人間全体だと規定されていることが注意されなくてはならない。この点が、精神病理学と、正常な心を問題とする通常の心理学と異なる点である。何故ならヴァント以来正統的な心理学は専ら要素的な事象にのみ研究を限定してきたからである。しかしへースによれば、それらは本来の精神病においては、障害されることがほとんどない(5)。それらの障害が現われるのは神経学的器質的な脳傷害の時のみである。しかも精神病理学的現象の多くは、それに対応する「正常なもの」が未だ心理学によって研究されておらず、それ故精神病学者は、より広い

- 1 Karl Jaspers: Philosophen des 20 Jh. Hrsg. von Schilpp 1957. (KJ) K. J. Kolle: K. Jaspers als Psychopathologe s. 438 Anmerk.
- 2 Allgemeine Psychopathologie 8 Aufl. 1965. (AP) s. 256f ngl. Philosophie (PH) s. 304.
- 3 AP 5, 648.

(1) 著者名のなきものはヤスペースの著作である。

視界をもつた心理学を自分で作り上げねばならないのである(5)。おそらく精神分析学や人間学派が精神病の研究から出現したゆえんはここにあるであろう。

しかし、ヤスペースにおいては、人間全体は認識されない。「個々の人間をけつして心理学的諸概念に解消しつくすことはできない」(6)という、おのれの限界づけによって始まる『精神病理学総論』は、一つの理論に基づいて人間存在についての閉鎖的体系を構築することを何よりも排斥するのである。とすれば、それにもかかわらず、人間全体をテーマにする精神病理学は、いかに構成されるのであるうか。

たしかに精神病理学が問題とする現実は、「その都度個性的な全体として」目の前に立つ。しかしヤスペースによればあらゆる認識は部分をのみ射当てるものであり、私達は認識する時、この全体を破碎するのである。更に、確定された事実はすべて方法によってのみ得られるのであり、事実と方法の間に根本的な区別はない(7)。それ故、たとえ全体を求めるようと、全体そのものは直接対象とならず、「個別を越え行く道を通つてのみ」対象となる。しかも対象になる全体とは「その本質の図式として」であつて、全体そのものはあくまで理念のままである、と云われる所以である(8)。

かくして、ヤスペースのおこなったことは、事実をそれぞれの方法に従つて確定し、区別し、秩序づけること、それぞれの方法の限界と機能を定め、その機能に従つて精神病理学全体を秩序づけることであった。閉鎖的な一つの理論体系に

代って、開かれた方法的秩序を提供するところにヤスペースの精神病理学の特質があつたと云える。

即ち、先ず最初に、心的生活の個々の事実の把握が、現象学を初め、作業心理学、身体心理学、表現心理学、等によつておこなわれる。

次に、その事実間の関連の把握を行うのが了解心理学と説明心理学である。

第三に、心的生活の全体——と云つても経験的、相対的なものにすぎないが——が、疾病学、形相学、伝記学によつて求められるのである。

これらの多様な方法の中でも、ヤスペースの精神病理学を一層特徴づけているものは、現象学、及び、了解心理学である。ということは更に、ヤスペースの精神病理学においては了解、或は了解可能性という概念が特徴的であることを意味している。木村敏氏によれば、ヤスペース以前の精神病理学は、学問の客觀性を保持するためには、「眞の研究対象たるべき患者の心そのものに入りこむことを避けて、いわば、心の外見の異常に頗るまざるをえなかつた。……ヤスペースの功績は、この心的現象そのものの現在的直接的把握の方法論を精神医学に導入したことにある(9)。」その方法こそ、「了解Verstehen」であり、了解の仕方に従つて現象学や、表現心理学、了解心理学が成立するのである。

了解の概念は、しかしヤスペースにおいて必ずしも明瞭なものではない。彼によれば、了解にはさまざまなる種類があ

る(19)。先ず、合理的了解と心理学的了解（感情移入的了解）が区別されねばならない。これはシンメルの区別した。「話の内容の了解」と「話し手の了解」に相応するもので、話の思考内容が論理学の規則に従つて洞察されるのが合理的了解であり、心理学的了解とは、話し手の心的関連を直接的にとらえること、たとえば、思考内容を思考者の気分、希望、恐怖等から了解することを云う(20)。精神病理学で問題なのは、云うまでもなく、後者、即ち共体験によつて、感情移入によつて、あるいは、「他人の心の出来事に自分の心を一諸に振わせることによって(21)」得られる他人の心の直観的把握である。更に心理学的了解も数種区別される。(1)身振りや行動作品等、外に表現され、知覚されるもの（客観的微候）を媒介として患者の心を把握するのは表現了解と呼ばれる。（表現心理学）(2)それに対しても、患者が自己を描写したもの（主観的微候）の助けをかりて、患者の体験を自分の心中に描き出すのは現象学的了解である（現象学）。これらは個々の心的性質や状態をそのまま把握するものであつて静的了解とも呼ばれる。(3)これに対し現象学や表現心理学を媒介として、心的なものを他の心的なものから、即ち、心的なものをその動機から了解することは動的了解と呼ばれる(22)。この動的了解が、了解心理学の仕事なのである。ただし、これらの了解が単に、共体験や魂の共振動に留まれば、まだ科学と呼ぶことは出来ない。この経験を思考によつて対象化し無限に多様な内容を区別し、普遍的なものを取り出さねばな

らない(23)。かくして経験科学としての心理学が誕生するのである。

これらの了解のうち、たとえば、合理的了解が、心理学的了解と同じ意味で了解と呼ばれるものであるかは問題がある。しかもヤスバースは、これらの了解が更に進み行く領域として、精神的了解、実存的了解、形而上学的了解をあげる。即ち了解の概念は心的なものの了解を越えて拡大されるいくのである(24)。とすれば、了解という概念、更に了解可能、了解不能という概念は、学問的術語としていたつてあいまいなものだと云わざるを得ないであろう。

考察を了解心理学にしほつても、私達は問題ある諸特徴をいくつかを指摘し得る。たとえば、第一に、了解心理学が挫折する了解不能なもの—実存—が心ではないかぎり、心とは本来了解可能なものと云いかえることができる。この了解可能なものはどの個人においてもそれ自身において関連を持つており、この了解関連の全体が人格、あるいは性格と呼ばれるものにはかならない(25)。心は了解関連であり、それを明らかにするのが了解心理学である。とすれば、「本来は観の側の認識の方法であつたはずの了解の概念が、いつの間にか対象の側の質的特性を規定すべき標識に姿をかえてしまつてゐる(26)」といふ指摘は正しい。

第二に、了解心理学の眞理性の保証は、ただ了解する際に直接的に確信される明証性にのみ依存している。「この明証性の承認が、了解心理学の前提である(27)。」とヤスバースは

云う。とすれば、科学的方法としての了解は私達の日常的な他人経験以上にどれだけ純化されたものであり、思考の媒介によって獲得されるという普遍性、客觀性がどれだけの権利を主張し得るものであろうか。

と云うのも、第三に了解そのものに次のようないまいな主觀的性格がつきまとっていると思えるからである。――

(一) 了解するとは、「(自分の心を) 他人の心の中に移し入れること」⁽¹⁹⁾である。とすれば他人の心の了解が、他人の心の中に移し入れられた自分の心の了解以上のものであるという保証は、いったいどこにあるのであるうか。

(二) 了解することは同時に評価することであるとヤスパーは云う。勿論、科学的認識においては評価は停止しなければならず、了解心理学においてもそれと類似な要求、簡単に云えば、正しい了解、したがって正しい評価への要求があるという⁽²⁰⁾。しかし、はたして普遍的客觀的な評価があり得るか。あるとしたらいかにしてあり得るのであるうか。

(三) 「研究者それぞれにとって、彼が何をまたいかに了解できるか」ということは、彼の人間的水準の事柄である⁽²¹⁾。「了解の豊さ、深さがそれぞれの人によつて異なるとすれば、了解可能なものと了解不能なものとは原理的な一線を画することができるのであらうか。しかも了解心理学は、一見したところでは了解できないような異常な関連にまで了解を拡大しようとする試みなのである⁽²²⁾。」

総じて云えども、了解心理学にいわゆる主觀的な色彩がつき

まとうことは否めない。むしろこの性格は了解心理学のみならず、彼の精神病理学全体を貫ぬく特徴かもしない。たしかにヤスパースは心を対象化し客觀的に把握することを目標とした。独断的理論を排し、多様な方法を採用したのもそのためであった。しかしルフェーブルは、その意図をヤスパースは、心理学にとっての究極の立脚点を從来の心理学のように心理学者の外におかず、心理学者の主觀の中に置くことによって、即ち心理学者の中に心理学の場を変更することによって果そうとしたのだ、と云う⁽²³⁾。一般に経験科学の認識の客觀性普遍性を保証するのはその方法にある。しかし了解心理学はその保証を与えない。逆に了解心理学が成立するためには、少なくとも了解する心と了解される心の同一性があらかじめ前提されなければならないのである。

だが、このような問題点にヤスパースは答えていない。石川清氏の云うように、「彼の了解精神病理学は、全く未完成である⁽²⁴⁾」のである。この未完成は上述してきたように、私にはヤスパースの了解的認識の不充分さにあるのではなくて、了解そのものの本質の解明の欠如にあると思われる。了解はヤスパースにおいて、いわば私達の意識現象の不可思議な事実として前提されているに留まっている。だがその解明のためにはおそらく了解心理学が越え出られねばならない。後年ヤスパースは哲学へと越え出たけれども、そこで彼が果した仕事は了解心理学を基礎づけ得るようなこの方向をとるものではなかつたのである。

- 1 AP s. 6
2 AP s. 5
3 AP s. 6
4 AP s. 2
5 AP s. 3
6 AP s. 1
7 AP s. 37
8 AP s. 25
- 9 異常心理學講座第七卷 (異心七) 精神病理學 I (ふやうりゅうがく I) (ふやうりゅうがく I)
10 AP s. 255 木村敏「精神病理學の潮流 I」 s. 98
11 Gesammelte Schriften zur Psychopathologie 1963 (SP)
12 AP s. 19
13 AP s. 255
- 14 AP s. 19 SP (PFP) s. 317, s. 322
15 AP s. 19 SP (PFP) s. 317, s. 322
16 AP s. 260
- 17 異心七 木村敏「精神病理學の潮流 I」 s. 98

18 AP s. 252, SP(KVZ) s. 331
19 SP (PFP) s. 314
20 AP s. 257f
21 AP s. 261
22 AP s. 260

K.J.; L. B. Lefebvre : Die Psychologie von Karl Jaspers
s. 477f

II

ヤスペースにおいて科学と哲学の区別は絶対的なものであった。そのいとは『世界觀の心理学』以来多くの著作の中でも、殊に一九四八年の講義『哲学と科学』において明瞭に主張されてゐる。

簡単にしていえば、両者の区別は対象にある。科学の対象は、对象化され得る限りでの世界内の現存在であり、哲学は超越的 existence を問題とする。しかもヤスペースによれば、私達にとって知り得る一切のものはすべて意識の中に入り対象的ななり得るを得ない(→)。されば、私達は対象的な知識を与える専門は科学以外にならない。とはいっても対象的なものが存在するだけではなく、したがって私達は存在全体を知ることはできない。科学によって知り得ないのみならず哲学的な全体知り得ないものもある。超絶的存在を求める哲学は知識ではあり得ないからである。哲学するとは絶対的無知に突きあたる、この無知においてある対象性を超越するといはざば

かならず、それは普遍的な対象知をもたらすのではなくて実存的交通における訴えとしてのみ可能的実存に伝達されにすぎないのである。

ハイデッガーの基礎存在論に対するヤスパースの批判の眼はその点にある。ヤスパースによれば、ハイデッガーは人々を「哲学することに導くかわりに人間存在の全体的輪郭を知ることへと導く」ものであり、それ故それは哲学的誤謬だと云う(2)。したがつてヤスパースはまた哲学を精神病理学の中に持ちこむことを非難する。と云うのも一九二〇年代末ショトラウスやフォン・ゲーブゼッテルらのいわゆる人間学派や、現存在分析学派と呼ばれるビンスヴァンガー等がフッサールやハイデッガーラの哲学を精神病理学の中に持ちこんでいたからである。狂気を実存的、形而上学的に解釈してもそれは精神病理学的な認識ではない。むしろ哲学の導入は経験科学ととしての精神病理学、心理学の破滅であり、科学的誤謬だと云う(3)。一般的に云えば、哲学が精神病理学にとって持つ意味は方法的反省にあり、知識を秩序づけ、その限界を意識せしめることにある(4)。その点を除いては哲学を研究することは何ら積極的価値を持たないとさえ彼は云うのである(5)。

かくしてヤスパースの哲学は科学を越え、超越的 existence を追求する。その際彼が科学と異なる固有な哲学的方法採用をしているならば納得できる。しかしヤスパースは既に述べたように了解心理学を方法とするのである。いったい了解心理学

は実存照明の中で、どのような形と権能をもって使用されているのであるか。

実存の側における了解不能なものは、ヤスパースによれば「無制約的な決心において、……絶対的な意味の把握において、経験的状況が限界状況になる時の根本経験において姿を現わす自由(6)」である。実存照明とは、自由がそれとして、あるいはそこにおいて生きる現実、即ち、「真剣さ、絶対意識、限界状況、決断、引受け、根源」の照明なのであり、これらは了解可能より以上のもの、心理学的経験的研究では達せられず、また心理学的に扱われば意味を失ってしまうものであるという(7)。

了解心理学が実存に直面して挫折するという事態は、ヤスパース自身がゴッホやヘルダーリンの精神病理学的研究を通じて、また臨床的な患者との接触において経験したことであろう(8)。実存照明はおそらくこの経験に基づいて成立している。だがしかし了解心理学は単に了解不能な自由に挫折せんがためにのみ、いわば実存照明の前段階としてのみ使用されたにすぎないのでない。

実存照明においてヤスパースが語るのは、実存の超越への運動であった。勿論、彼においてまったく超越的なものそのものは語ることはできない。それ故ヤスパースとは「現存在としての可能的実存(9)」を「世界と実存との境に(10)」提出するのである。しかも実存とは意識にほかならず(11)、したがつて実存照明において語られるものは意識の運動であり、

経験であるのにほかならないと云えよう。たとえば、真剣さや絶対意識においてのみそれが語られるのではない。限界状況の照明として問題になるのは限界状況の存在論的な構成等ではなくて、可能的実存がいかに限界状況に直面しそれを引受けけるかという、意識としての可能的実存の経験なのである。形而上学においてもこの事情は同じである。そこで語られるものは超越者そのものではなく、いかに可能的実存が超越者に直面し確信し、それと関わりを持つかということなのであった。

ヤスパースにおいて、このような動的な意識現象の把握の仕方こそ、了解にほかならなかつたのである。可能的実存の運動は絶望と信仰、憎と愛、否定と肯定等の対立を往復し、あれかこれかという無制約的な選択を迫られる一つの弁証法であり、そしてこの弁証法は「了解可能性の根本形式」の一つとして了解心理学が有する方法なのであった(12)。実存とは了解不能な自己に至らんがための「自己」了解の過程(13)にはかならず、その訴えを聞きどると、了解を介して我がものにすることである。(14)したがつて実存照明とは、この過程の照明としてむしろ自己了解の運動そのものと云い得る。実存照明が経験科学としての了解心理学と異なる点は、ただ後者が客観的な対象認識として普遍性を主張するのに対し、「象徴了解(15)」であり、歴史的な唯一のものを背後に秘めている点である。即ち実存照明とは、それを完全に了解するためには、その中は自から生きねばならぬものであり(16)、や

スパースは私達に自から実存することを要求するのである。このようにして実存照明はたしかに了解心理学を方法としてのみ成立する。即ちヤスパースの哲学は精神病理学の成果の上に、それと連続して成立しているのである。そして、実存照明が、実存の世界内における現象としての可能的実存の運動を明らかにするものである限り、そこに哲学方法としての不整合はないであろう。問題はこのことがいかなる結果をヤスパースの哲学にもたらしたかにある。

了解心理学を方法として了解不能なものを求めるということが、ヤスパースの哲学に混乱とあいまいさを与えていることは否めない。たとえば、ヤスパースにおいて実存概念そのものが明確ではない、と私には思われる。実存は「私がそれから思惟し、行為する根源(17)」、「自己」存在の暗い根柢(18)」であり、しかも「存在し得、存在すべき(19)」ものである。あるいは実存、可能的実存(20)という区別、実存するという言葉。これらの表現が実存という一点でどのように結び合い関わり合うのかは必ずしも明らかではない。

あるいは、交通を考えてみよう。云うまでもなくヤスパースにおいて、真の交通は実存相互の愛の交通である。しかし、互に了解不能な実存相互の間に交通が、しかも真の交通や愛が成立するのは何故であろうか。

あるいは限界状況にも混乱がみられる。死とは私達にとって生命の終りである。しかし、その死において亡びるのは單なる現存在であり(21)、したがつてそれは実存にとつて恐れ

ぬぐあわのではない。実存にとって恐るべきは「実存が存在しないこと〔死〕」であり、むしろ実存は限界状況における飛翔において不死性を確信する〔死〕。それではいへど、「生命が現存しないこと」と「実存が存在しないこと」は二様の死は、全然異った存在様態であるのか、それとも互に関わり合うものなのか。そうだとすればいかなる関係にあるのか。そもそも限界状況としての死とは何か。あるいはまた少なくとも、この限界状況の照明において、死を超越することが説かれるのを見る時、私達は、苦、争、責といった他の限界状況との相違を感じざるを得ないであろう。たしかにこれらでも現存在の有する苦、争、責と実存のそれらとは異なるであろう。とくにわれらにおいては限界状況の経験は、不可避的な苦、争、責を曰からるものとして引受けたところに成立するからである。

実存照明におけるいうした問題点は、ヤスペース流に云えば、実存照明が実存の自己了解の現実の照明であって、実存についての理論ではないといふに依存すると思われる。ここでも私達は実存の了解内容を越えて了解そのものに向う存在論的問は断念せざるを得ない。たしかに、実存照明が客観的普遍的知識に達することを求めるものではない限り、了解心理学で問題であった、方法としての了解の不確かさは問題にならないであろう。むしろ、ヤスペースが、キルケゴールとニーチェを最大の了解心理学者と見做すひとかへ(24)うかがわれるよう、了解の深みは実存の曰く「解か

ら由来し、あるいは更に了解そのものが実存に根柢するものかもしれない。しかし、了解することそのことを試みる実存照明ではこの謎は解かれ得ず、こゝで了解はただ意識現象の不可思議な事実として前提されたままなのである。私達はこのよき実存照明の性格の中に、事實をそのまま把握し、制限し、秩序づけることを課題とする現象学の立場、即ち経験科学者としてのヤスペースの姿勢をうかがい見ることがである。この意味からもヤスペースの哲学は精神病理学の影響のもとにがあるのである。

1 Philosophie 2 Aufl. 1948 (PH) s. 6

2 AP s. 649

3 AP s. 648, s. 650f, vgl. KJ Antwort s. 806

4 AP s. 5, s. 643, KJ Antwort s. 806

5 AP s. 6

6 AP s. 256

7 AP s. 256

8 ベーベル・ベック・エッカハホ 木村上仁訳（創元社）昭和二十一年

9 PH s. 15, vgl. s. 296

10 PH s. 16

11 PH s. 17

12 PH s. 283ff

13 PH s. 304

14 PH s. 162ff, s. 243ff

15 AP s. 275ff

- 16 AP s. 277 「完全な象徴」了解は、その象徴の中に由から生きる人間を要求する。」
- 17 PH s. 13
- 18 Von der Wahrheit 1947. s. 77
- 19 PH s. 295
- 20 PH s. 472, s. 473
- 21 PH s. 486
- 22 PH s. 488
- 23 PH s. 753
- 24 AP s. 292

III

ヤスペースの哲学をこのように性格づけた精神病理学との方法的連続は、いわゆる根拠から由来したか。既に明らかかなように、それはひとえに人間を意識としてとらえたことにある。ヤスペースは『哲学的自伝』の中で、次のように書いている。——自分の思索の道にとつて決定的だったことは、「心はいわばすべてである」というアリストテレスの命題に立脚して心理学の研究を始めたことであった。何故なら、広い意味で、心理学的側面を持たないものは存在しないから、云々。この前提是明らかに心理学のみならず、ヤスペースの哲学をも一貫して貫くものであったといふのが、とができる。

人間存在を意識としたることは、必然的に主観—客観の

図式を土台とすることを意味する。ルフェーブルの指摘するように、ヤスペースの精神病理学はこの図式の上に成立している(4)。そのことによって経験科学としての精神病理学が主観の立場に立つて客観的認識をおこなうということばかりではなく、対象としての人間が主—客—関係として規定され得ることとなる。それ故、ヤスペースの精神病理学は、この図式のもとに構成されてくるのである。精神病理学が人間全体をテーマにする限り、主—客—分裂の克服を目指す試みが生れるのは当然のひじである。ルフェーブルは、ビンス・ヴァンガードを引合にだし、態度 Verhalten を代えて体験 Erlebnis に着目するのを提倡する。しかし、体験が意識体験である限り、この提倡もおそらく不充分であろう。

ヤスペースにおいては、この主—客—分裂を克服することこそ、哲学的根本的な課題にはかならなかつた(5)。そしてこの努力はたしかに包括者思想として結実する。しかし、この理性の哲学も実存照明と連続するものであり(4)、また人間を意識としてとらえる前提に立つ限り、その成果はうたがわしいと云わねばならない。この努力はただ包括者の覚知という実存的体験を主張することでも留めざるを得ないのである(4)。了解という方法に問題がある限り、少くとも哲学は、この問題点を解明し解消しなければならない。そのことは了解という謎そのものを解明することであり、云うまでもなくそのためには了解という方法を用いることはできない。哲学はこの心理学的方法を越える新しい方法を見出し、そのもとで人

間存在をとらえ返さなければならぬ。そしてそのことは同時に人間を意識とする見解を乗り越えることを意味する。人間存在の解明はおそらく対象それ自身が同時に解明者であることによって、対象と方法の相互限定を免れ得ないものである。

その端的な実例を私達は了解と了解可能なもののとの関係に見たのである。たゞ、ヤスペース自身、事実と方法の区別はないという形ではつきり述べていた。方法がそのようなものであれば、新しい方法は新しい人間像を提出するはずである。たとえば、ハイデッガーの哲学をそのような試みとみなすことがである。そう解すれば、ヤスペースのハイデッガー批判はその大きな理由を失うことになるであろう。あるいはまたこのような新しい方法が見出されたならば、精神病理学にとっても実りあるものであろう。たとえヤスペースが「ようにその成果を精神病理学の中に持ちこむことはできないとしても、人間全体をテーマとしながら、その人間を心として意識とする単純なが、したがつてまた、「心を病む」ということの意味があらためて考察し返さなければならないのではあるまいが。

- 1 Philosophie und Welt 1958. Philosophische Autobiographie s. 303.
- 2 KJ; L. B. Lefehre op. cit. s. 485
- 3 KJ; Antwort s. 809
- 4 哲学雑誌第七八巻七五〇号「現代哲学の謎題」1963 「ヤスペースの実存と理性」参照